いろんなジャンルの短編集

橘 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いろんなジャンルの短編集

【Ｎコード】
Ｎ５８１８Ｑ

【作者名】
橘　潤

【あらすじ】
タイトル通り、ジャンルに関係なく短編を載せるつもりです。

たまに、アンケートをとるつもりです。

各話、読みきり方式の予定ですが、たまに前編・中編・後編（中編はない場合もある）と、分けて投稿することがあると思います。

1

見晴らしのいい草原。雲一つない青空。そんな空を仰向けになって眺めていると、鳥が目の前を飛んで行った。優雅に飛び回っている鳥を見て、羨ましいと思ってしまう。

俺には、自由に飛びまわれる翼がないから…

――2001年6月8日金曜日・小学校二年生の時――

学校が終わってすぐ、俺は駆け足で家に帰っていた。友達と早く遊びたかったから。家のある方角から煙が上がっているのを見て、走る速度を上げた。家の前で人だかりができていたので、押し退けて一番前まで来た俺は、炎に包まれた家を見てその場に崩れ落ちた。

何が起きてるのか分からなかった。否、理解したくなかったんだと思う。その時、俺はとてつもない不安を抱いていた。父さんと母さんはどうしているのか、と。そんな不安が俺を襲っているとき、近くで話していたおばさんたちの会話で俺の心は絶望に染まった。

――中にまだ二人、残っているらしいわよ――

――それって本当!?――

――えぇ、本当よ。さっき悲鳴を聞こえたもの。男性と女性の悲鳴が…――

俺はランドセルをそこら辺に放って、燃え盛る家に向かって駆け出した。だけど、後ろから女性に襟首をつかまれて引き止められた。

――離して！まだ中にお父さんとお母さんが！！――――

――――子どもの君が行っても無理よ！死んじゃう！！――――

――――でも！でもぉ……――――

俺が行ってもどうにもならないってことは分かってた。大人でも、入ったら生きて出てこれる確率が殆ど無いことも。

俺はその日から、天涯孤独になった。お祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、親戚も誰一人としていない。もう、大切な人を失いたくない。だったら、誰も好きにならなければいい。親しくならなければいい。大切な存在なんていらない。一生、一人でいい。

そして、俺の羽はズタズタに引き裂かれ、飛ぶことができなくなった。殆どの人が持っているはずの心の羽（希望の塊）。俺の心が絶望に染まったせいで、飛べなくなった。俺はもう一度、あの鳥のように飛べるようになるのだろうか…この、心の闇から抜け出すことが…できるのだろうか……やはり…今のままじゃ……心を閉ざしたままじゃ、無理なのだろうか……でも、心を開くのは怖い。また、大切なものができて、それを失うって考えると…震えが止まらない。

「どうしたの？」

背後から聞こえた少女の声に、一瞬ビックリしたがすぐに平静を装う。

「誰？」

「普通、人に名前を聞くときは自分から言うんじゃないのかな？」

「…桐原斬人（きりはらきると）」

「私は芽衣、渚芽衣（なぎさめい）。で、どうして泣いてるの？」

「え？」

慌てて頬を触ってみると、確かに濡れていた。涙を袖で拭って少女がいる方とは逆を向き、口を開く。

「何でもない…」

「何でもなかったら泣かないと思うけど…」

「理由があっても赤の他人に言うと思うか？」

「そりゃぁ、そうだよね」

渚は苦笑しながら隣に座ってくる。

「何で俺に話しかけてきた？」

「え？」

「だから、何で俺に話しかけてきた？」

「寂しそうだったから」

渚はどこか遠くを見て、語りだす。

「私にどこか似てる気がして…私の親は共働きでさ、小さい頃から

家で留守番してたんだ。夜遅くまで、親が帰ってくるのを待って…
……」
「それぐらいだったら、まだいいだろ…一生会えないわけじゃない
……」

俺は初対面の奴に何言ってんだ。

「俺の親は…もう、帰ってこない。俺が小二の頃に火事で死んだ。
放火だったんだ。犯人は捕まったけど…そんな事どうでもいいって
思ってた。犯人が捕まっても、俺の親は一生帰ってこないんだから
……」
「…親戚の人は？」
「いない。天涯孤独ってやつだ。はぁ…初対面の奴にほんと、何話
してんだか…じゃぁな。二度と会わないだろうよ」

まぁ、おかげで決心はついた。礼だけでもしとくか。

「…ありがとな……」

俺はそのまま去ろうとしたけど、できなかった。渚に手をつかま
れてたから。

「死ぬつもりじゃ…ないよね？」

何で分かったのか不思議だった。少し驚いたものの、表情に出る
ほどじゃない。

「もし、そうだとしたら…」

渚が一瞬、ビクッとした。おそらく、今の俺の表情はとても怖い

んだろう。

「絶対に止める」

「何で、そこまでする事ができる？」

「何でかはハッキリとは分からない。でも、ほっとけないの。他の人だったらこんな事しなかったと思う。こんな気持ちになったのはたぶん…」

俺も、今のこいつの気持ちは分かるかもしれない。俺もこいつ以外にだったらこんな話、しなかっただろうし。こいつが次に言う言葉は何となく分かる。俺も、同じだと思うから。でも、言うのが怖い。大切な存在を作るのが怖い。だからって、逃げればいいって訳じゃない。意を決して、口を開く。

「あなたに（きみに）一目惚れしたから…」

渚の顔が驚きの表情になる。そりゃそうだ。さっきまで死ぬつもりだった人間が、全く同じ事を言ったんだから。

俺は久しぶりに、心から笑うことができた。その表情のまま、渚にハッキリと告白（言う）

「俺と、付き合ってください」

渚の表情は次第に笑顔に変わり…

「はいっ！」

大声で返事をしてくれた。

1（後書き）

一日でこの話を書けるとは…

おかしなところはありましたでしょうか？

あと、これに合うサブタイを考えてほしいです。

思いつかなくて……

2　復讐

「フゥ」

長かったなぁ。

ようやく終わったんだ。

俺の目の前には大量の血を流してる男。手には血のついたナイフ。

「キャアアァァァァ！」

奥から出てきた女が悲鳴を上げる。

こいつ、俺達にあんな事しといて女なんていたんだ。

俺達の人生を奪ったこいつは、幸せになってたんだ。

「やだ…やめて…こないで！」

必死に叫んで、物を投げつけて男から逃げる。

死にたくない。こんな所で死にたくない。

部屋には、母さんと妹が、廊下には父さんが血まみれで倒れている。

殺される。誰か…助けて……

「フン！」

男の頭に椅子が直撃する。少し血が出てる頭を押さえて、椅子を抑えてきた人の方を見る。

「息子だけは、殺させん！！」

立ってるだけでも精一杯のはずの父さんが、椅子をもう一回投げる。

お願いだから大人しくしてて…死んじゃうよぉ……

涙が溢れてくる。

男は飛んできた椅子を避けて父さんに近づき、持ってたナイフで刺す。だが、それだけでは終わらず、抜いては刺し、また、抜いて刺す。それを何度も繰り返して、俺を見る。

遠くの方ではサイレンの音がする。男は舌打ちして玄関から逃げていく。

助かった。けど、みんな死んじゃった。俺以外、みんな。

さっきまで怯えていたのに、急に、怒りがこみ上げてきた。

――――殺す殺す殺す

殺す殺す殺す

死ぬ前に、この女に言う事がある。

「ごめん…あと、ありがとう……」

2　復讐（後書き）

う～ん。

酷いねｗｗｗ

誤字・脱字報告・感想・アドバイス。

待ってまぁす。

3

今年高校生になった俺、羽崎寧（はざきねい）は小学生になってから一人で家に居る事が多くなった。

みんなに寂しくないのとか、怖くないのとかよく聞かれていた。もちろん、最初は寂しかったし怖かった。夕方になると一緒に遊んでいた友達は家に帰る。俺も帰るけど、家には誰もいない。入ってすぐに電気をつけるまでは家の中は暗いから少し怖い。電気を点けたら点けたで家の中は静まり返ってて独りでいる寂しさが膨れ上がる。でも、それは最初だけで怖いとか寂しいといった感情はだんだん麻痺してくる。

最近では人と関わるのが嫌いになった。いつまで経っても成長しない、小学生みたいにふざける男子と、芸能人やドラマ、ファッションの話で騒ぐ女子。騒いでると言う自覚はないんだろうけど、俺にとっては騒いでるようにしか思えない。

たまに俺も話しかけられるからテキトーにあしらう。

生きる意味が分からない。何で生き続けるのか、何の為に生き続けるのか、何で生まれてきたのか。それが分からない。

昔、虐めにあっていた。恨みや憎しみ、怒りの感情に呑まれていたある日、それが辛くて死のうとしたけどできなかった。既に無くなったと思っていた恐怖という感情が残ってた事を知った。俺はその日から、感情を表に出さないようにした。最初は怒りに任せて暴れたりしていたが、中学生になった頃には全くなかった。

「羽崎。おい、羽崎」

目の前にはクラスメイトの……誰か。

「おい、聞いてんのか？」

「聞こえてるよ。で、何？」
「あの子が呼んでる」

そう言ってクラスメイトの誰かは廊下にいる一人の女子を指差す。

「教えてくれてありがと。で、お前誰だっけ？」
「昨日も名前を教えたんだけど……市原悠樹。一週間に三回は教えてるぞ」
「市原ね。十分後には忘れてると思う」
「早すぎるだろ！？」

俺は一…何とかのツッコミを無視して待ってる女子のところに行く。

「用件は？」
「あ、あの……私と付き合ってください！」
「無理。じゃあね」

俺はそれだけ言って自分の席に戻る。すると、クラスメイトのほとんどが集まってきた。

「お前、あの言い方はないだろ」
「かわいそうだよ」

とか言ってくるが、正直五月蠅い。

「てめぇらに文句言われる筋合いはない。それに、てめぇらは相手の名前すら知らないのに付き合えるのか？」
「だからってあの言い方はないだろ」
「そうだよ、他にも言い方があるでしょ」

五月蠅いしうざい。さっさとどっか行けよ。

「ほら、あの子泣いてるじゃん」

「はぁ…めんどくせぇな……」

溜息を吐いて机の横に掛けてある鞄を取り、席を立つ。

「おい、どこ行くんだよ」

「見て分かんねぇのか？帰るんだよ」

「何で？」

「てめぇらがうざいから。それ以外に理由がいるか？てめぇらの今の行動は余計なお世話としか言いようがない。もし、てめぇらが俺と同じ立場だったらどう思うか考えてみろ」

邪魔だ。と言って人を押し退けて進む。

「ざけんじゃ…ねぇよ！！」

後ろから呟くような言葉が聞こえ、横に軽くずれる。直後、俺の頭があった場所を怒声と共に拳が通過する。

「さっきから聞いてりゃてめぇ！ムカつく事ばっか言いやがって！！」

「うっせぇな…んな近くで怒鳴んなくても聞こえてんだよ。ムカつくんだったら、俺に関わるな」

俺はそう言って教室を出て、まだ泣いてる女子の元へ行く。

「おら、いつまでも泣いてんじゃねぇよ。男だったら他にもたくさ

んいる。てめぇの事を本気で好きになってくれる奴だっている筈だ」
「私は、あなた…じゃなきゃ、ダメなんです…」
「何で俺じゃなきゃダメなんだ？」
「大人っぽくて、たまに笑うけど、悲しい感じがして…夕方に教室で空を眺めてるその姿が、とても綺麗で、でも、儚くて、触れたら簡単に壊れそうな感じがして……」
「早く理由を言え」
「夕方に見たあなたの姿に惹かれて、それ以来あなたの事が頭から離れませんでした。何であんなに悲しい顔をしてたのか知りたいんです」
「それって、好きって感情はないんじゃねぇのか？」
「いいえ、好きです。最初はその事を知りたいだけでした。でも、気が付いたらあなたの事を好きになってました。だから、あなたの事は諦めません。絶対に」
「一生叶わない思いだとしてもか？」
「叶えてみせます。振り向かせてみせます。絶対に」

その言葉を聞いて、心がざわつくのが分かった。今まで押さえ込んでた感情が溢れそうになる。それと同時に、今まで分からなかった、この変な感情が漸く理解できた。

「俺は、誰かに気付いてもらいたかったんだ」
「え？」
「気付いてもらいたかったけど、人と関わるのが怖くなってたんだ」

同じ階にいる奴らが俺達を見てる。

「誰かと関われば、互いに傷つく。楽しいことよりも、傷つくことの方が多い。それが嫌で、全ての感情を押し殺した。こっちから話しかける事はしないようにした。だけど、俺は心のどこかで他者と

の繋がりを求めてたんだ」

そこで一旦言葉を区切る。彼女の目を見て、口を開く。

「名前…」

「え？」

「お前の名前、教えろ」

「鍵城舞（かぎしろまい）」

「舞か。俺の名前は知ってるだろ？」

「うん」

「さっきの返事、取り消せるよな？」

彼女は無言で頷く。

「今すぐ付き合う事はできない。でも、時間はまだある。暫く、考える時間をくれるか？」

さっきまで暗かった彼女の顔が明るくなっていく。

「はい！」

「寧、何してるの？」

「ん？あぁ、昔の事を思い出してたんだよ」

「昔って、いつ？」

「お前が告白してきたあの日」

俺はあの日を境に、生きる目的ができた。その切っ掛けをくれた彼女と、今は幸せに過ごしている。

～ＦＩＮ～

3（後書き）

無理矢理すぎだよね（苦笑）

サブタイが思いつかない。

市原の扱いが酷い気がするが…まぁ、仕方ない！

4

２月１４日、バレンタインデー。

クラスの男子は女子がチョコをくれる事を願っているようだが、俺はどうでもいい。甘いものが苦手だからチョコ貰っても食えないし、ホワイトデーにお返しを用意しなきゃならない。唯一、俺が甘いものが苦手なのを知っている幼馴染の栞（しおり）は、ビターチョコを使った生チョコとブラウニーを毎年くれる。一昨年前まではお返しにクッキーを焼いていたが、去年から高校生になった俺はバイトをして溜めたお金でネックレスを渡した。本命じゃないのはわかってるし、俺もその気はないから『いつも世話になってるお礼だ』って言って。

で、今目の前に小さな箱を持った栞がいる。

「はい、チョコ」

「ありがとう」

俺は差し出された箱をお礼を取って受け取る。

「お返し、期待してるからね」

「口に出して言うかぁ、普通。ま、用意はするけど、あんまり期待すんなよ」

「う～ん…わかった。じゃぁ、また後で！」

走りながら教師とを出て行く栞。携帯を開いて時間を見ると、もうすぐ一時間目が始まる時間だった。

3月13日、ホワイトデー前日。

私は明日、大事な話があるから家に来てと、幼馴染の海音(かいん)に連絡をした。今からでも凄く緊張する。彼はずっと、勘違いしてる。私の気持ちを……

俺は今、ある店に来ている。栞から電話があった時、回線越しでもわかるくらいにいつもと様子が違った。どんな話をされるかはわからない。でも、俺も彼女に伝えたい想いがあるから。もし、この想いを伝えて、今まで通りの関係に戻れなくなっても構わない。伝えなかった時の方が、絶対に後悔するから…

「これをください」
「畏まりました」

3月14日、ホワイトデー。

栞の家に来た俺は、すぐに彼女の部屋に通された。俺達の間に流れる重い空気。俺が先に言おうと思った時、彼女が勢いよく切り出した。

「私と付き合ってください！」

俺が言おうと思ってた事と同じ内容。な～んだ。結局は両想いだったんじゃないか。俺は鞄にしまっていた昨日買ったものが包装されている青と赤の二つの箱を取り出す。

「いいよ」

俺は微笑みながら赤い箱を栞に渡す。さっきまでの重い空気は一瞬で消え、彼女の表情が笑顔に変わる。去年までは俺もそんな気はなかった。でも、今は違う。彼女のことが好きだってハッキリと言える。

彼女は俺に抱きついてきて、漸くもう一つの箱に気が付いたようだ。

「こっちは？」

「一緒に開ければわかるさ」

彼女は赤、俺は青い箱を開ける。中には同じ形の対となる色違いの装飾が施されたネックレス。赤い箱には青、青い箱には赤いのが入ってる。これは俺に店員が勧めてきた事。青い箱に彼女に渡すものを、赤い箱に自分で着けるものを入れ、彼女に赤い箱を渡す。その後は……

「栞。後ろを向いて」

栞が俺に背を向ける。そして、そっと赤い装飾の施されたネックレスを着けてあげる。

「そっちが本当に渡したかった方だよ」

俺がそう言うと、彼女は理解したのか、俺の後ろに回って彼女が手にしてる青い装飾の施されたネックレスを着けてくれた。

「これでいいんだよね？」

「あぁ」
「もしかして海音も同じ事を言おうとしてたの？」
「そうだよ。ＯＫを貰ったら今みたいに赤い箱を、ダメだったら青い箱を渡すつもりだったんだ」
「もう片方はどうするつもりだったの？」
「誕生日に、好きな人ができたらその人にあげてって言って渡すつもりだったよ」

俺がそう言うと、栞が抱きついてきて耳元でこう言った。

「海音のそういう優しいところが大好き」

この日、俺達は幼馴染という関係から恋人に変わった。

～ＥＮＤ～

4（後書き）

文字数１４５１

少ないねぇ

更にありきたりの内容。

何か、恋愛モノが多い気がする。

次は４月中旬かな。

5―1

走る。
とにかく走る。
ひたすら走る。
追っ手を振り切るために。
霧が立ち込めている森の中を…
５０ｃｍ先さえも見えない、濃い霧の中を……
逃げなくてはいけない。
彼女を守るためには、僕は遠くに逃げなければならない。
僕が傍にいたら、彼女も巻き込まれる。
彼女は悲しむだろう。
二度と会えないかもしれないのだから…

「奴はどこに逃げた！」
「くそっ！こんなに霧が濃いんじゃ探せねぇ！！」
「すぐ目の前しか見えねぇじゃねぇか」

追っ手の声が近づいてる。
この森は一年中霧が立ち込めていることから『霧の森』、または『迷いの森』と言われている。
この森に入って帰ってきた者は数えるほどしかいない。
僕はその中の一人。
でも、その時とは違って靴を履いてない。
鋭い草の葉に足には無数の切り傷ができた。
これ以上走る事はできない。
それに、珍しい事に霧が薄れてきた。
ごめんよ…
もう、君の所に戻る事はできなさそうだ……

追っ手が俺の事を見つけたらすぐに自殺するつもりだ。

「見つけたぞ！」
「捕らえろ！！」

早速見つかったか。
さようなら…
恨みたかったら恨んでくれ。
懐に潜り込ませておいた爆弾を取り出し、火を点けた。

5－1（後書き）

次回、女性視点のを載せます。

こんな時にこんな暗い作品を載せてすいません。

5－2（前書き）

前回の続きです。

5―2

彼は私に言った。

――直に追っ手が来る。君は騒ぎが収まるまでどこかに隠れていてくれ。必ず帰ってくるから――

私は悟った。
もう二度と、彼には会えないと……
だから決めた。
私も死ぬと。
あなた一人で逝かせはしない。
でも、少しは彼の負担を和らげて上げたいから、私は隠れない。
この家の至る所に爆弾が置かれている。
一つでも爆発したら全て爆発する。
そうなればたくさんの人に被害が出るだろう。
それでも、私は彼の助けになりたい。
玄関の扉が大きな音を立てて開いた。
もう来たんだ……

「おい！そこの女！奴はどこだ！！」
「匿っているのはわかってるんだぞ！！」
「正直に話せ！」
「それより、この家を見て言う事は何もないんですね？」
「！！？」

彼らは今気付いたようだ。

でも、もう遅い。
逃げ出すことはできない。
私は驚いている彼らを他所に、一番近くの爆弾に火を点けた。

5－2（後書き）

よし！

連投！！

まぁ、短すぎるから当たり前か。

さて、とにかく言う事がある。

こんな時にこんな話を書いてすいません！！

感想にどんな事がきても仕方ない！

6（前書き）

ミステリー？に挑戦してみました。
違うな。サスペンス…かな？

6

また、この時がやってきた。
これで何回目だろうか。あまりにも多すぎて、数えるのを止めてしまった。軽く百は超えているはずだ。
同じ事の繰り返しで飽きたな。

「ノイル、そろそろ本当の事を話してくれないか？キサラを殺したのはお前なんだろ！？」

しつこい奴だ。俺は殺してないって言っても、信じてくれない。まあ、嘘なんだけどな。

「何時までも俺の所為にしないでさ、さっさと自首しろよ、ルノ」

俺がそう言ったとたん、動揺し始めた。ったく、すぐに表情に出る癖、直んねえのかな。

「ど、どこにそんな証拠が有んだよ！？」

証拠になんのかねえ。だって……。

「お前が飼ってる毒蛇、確かキサラの死ぬ二日前に購入してたよな。キサラの手足や脇腹には動物に噛まれた後があった。まあ、あれからかなり経ってるし、蛇も成長して歯形は合わないだろうから、証拠にはならねえだろうな。
それに、ペットに殺させたとしても、それを証明する事が出来ねえし、飼い主の管理不足と言う事で刑はいくらか軽くなるはずだ」

そっと、テーブルの裏に貼り付けたボイスレコーダーのスイッチを入れておいた。このままコイツが喋ってくれればいいんだが。

「それは警察に言ったのか？」

「まだ言ってねえよ。これから言いに行くつもりだ」

どうでる。ここでコイツが俺を止めれば、こいつが犯人なのは確定する。止めなければ別の手を打たないといけなくなる。

「言えよ。俺は殺してないからな。止めたらまるで、俺が殺したみたいじゃねえか」

チッ、動揺してたから冷静さを欠いてると思ったが、時間を与えすぎたな。少し時間を稼いで考えるしかない。

「それより、何で俺がキサラを殺したと思ったんだ？」

「お前、あいつに金貸してたろ。どう考えてもあいつはお前よりいい生活を送ってるのに、いくら催促をしても返してくれなかった。それどころかあいつは逆切れして、『たかが一万ドルくらいで五月蠅いのよ』って言った。

その事に腹を立てたお前はあいつを殺した。あいつの身体には一匹だけじゃなく、二匹の動物に噛まれた後があったみたいだしな」

噛まれた後は蛇一匹だけのはずだ。コイツは嘘を言って俺に誘いをかけてる。それが自分の首を絞める事とも知らずに。

「確かに俺はそれに腹を立てた。だが、それはお前もじゃないのか？貸した額は俺とお前、合わせて一万ドル。お互い、五千ドルずつ貸したんだ。それを“たかが”で済まされた。お前にも殺す動悸は十分あったはずだ」

互いに動悸はあったんだ。状況は俺の方が有利。こいつは無実の罪で捕まる事になる。

「それだったら、俺の蛇が殺したって言う証拠は？」

「毒の成分を調べれば同じものかどうか分かる。それに、いくら成長しているとはいえ、今の年齢と飼っている時期から、犯行時の大きさは大体分かるはずだと思うが？」

俺が勝つか、こいつが勝つか。あるいは、両方とも捕まるかもしれない。かなり危険な賭け。

俺の方が有利と言っても、油断は出来ない。だが、今コイツは凄く動揺してる。

「そろそろ行くから帰ってくれ」

ボイスレコーダーのスイッチを切って取り、ポケットに気付かれないようしまう。

ルノは納得がいかないようだが、帰ってくれた。

その時、俺は重大な見落としをしていた。彼が小さく、不敵に笑っているのに気付かなかったんだ。

警察署に着いてすぐに、俺は刑事さんに声を掛け、ボイスレコーダーを渡した。刑事さんはその場で録音されている内容を聞き、俺の手に手錠を掛けた。

「これはどう言う事ですか？」

「ノイル、キサラを殺した罪で逮捕する」

何で、何で俺が犯人だと分かった……？
俺は、余計な事を言ってないはず。

「証拠はこの、ボイスレコーダーだ。お前は彼女の死体にあった動物の歯形を蛇だと言った。これはまだ、公開されて無い内用だ。いくら彼女の死体の第一発見者だとしても、歯形を少し見ただけで蛇だと分かるのは珍しい。
もし、分かると言うなら、これは蛇の歯形か？」
「……」
「分かんないよな。だって、お前は蛇に興味を持った事も無ければ、飼った事も無い、それに、動物に詳しいわけでも無いだろ？」

そんな事が証拠になるのか？この程度だったら弁護士を雇えば無罪になる可能性が高い。

「確かに、動物に詳しいわけでも無いし、蛇に興味もありません。ただ、蛇だと思ったのは、ボイスレコーダーにも録音されてた通り、ルノが事件の二日前に蛇を飼い始めた事と、殺す動悸が十分にあったから」
「残念だったが、あの蛇は毒をもっていない。いや、今は持っていないと言ったほうがいいか」

くっ、最初から自分の罪を認めていたようなものか。もっと自分の言動に気を付けないとダメだな。
まさか、あいつがあの時動揺したのは、俺に余裕を持たせてミスを誘ったのか。ククク…俺が勝負を仕掛けた時から、負けは決まってたのかもな。
殺し方は簡単だ。あの女をまず、小部屋に入れる。無理矢理だ。そこにルノの蛇を放して噛ませる。後は、あの蛇がもつ毒と同じ成

分のものを購入し、蛇に噛まれた後に毒を注射器で流し込むだけ。まあ、噛まれた後気絶してくれたから良かったけど、しなけりゃ睡眠薬を使う必要があった。

「そうだよ…俺が殺した。あいつを殺した理由は金の事じゃない。親父の形見の、腕時計を壊した事だ。

あの女は時計を貸してと言ってきた。それだけならまだよかったよ。問題はこの後だ。俺は他の腕時計を渡そうとしたけど、あの女は形見の腕時計を無理矢理とって、『これ、借りるわね』って言ってどっか行きやがった。当然、止めたさ。だけどあの女は聞かなかった。次の日に聞いたら、『落として壊しちゃった。ごめんね』って」

「彼女はちゃんと謝ったんだな。だったらそこで終わりでいいじゃないか」

「そうもいかねえよ!!あの女は…『こんな安物、いくらでも買ってあげるわよ』って…これを許せると思うか!?あんたはこんな事されて、殺意が湧かないと言えるのか!?殺さないって絶対言えるのか!!?」

俺には無理だった。だってよ、形見ってのはとても大切な品だ。もし、君たちが俺と同じような事されたら、その時はどうする?

～ＦＩＮ～

7（前書き）

遅くなりました。

理由は、ネットにつなげられなかったｏｒｚ

悲しいぜ畜生！

今回は殺し屋の話。と言っても、依頼での殺しはしてません。更に人間離れした身体能力。

ｇｄｇｄです……。

7

嫌な視線を感じる。

俺のことが気味悪いんだろう。そりゃ、そうだよな。真夏にフード付きの黒いロングコートで全身を隠してたら、暑くないのか？とか、良く平然としてられるな。とか、変わり者と思われてる。

まあ、闇を知らない人間から見たらそうだよな。どの世界にも必ず、表と裏、光と影（もしくは闇）が存在する。闇側の人間からすれば、それが表で光が裏とも言える。どの世界でも、表と裏は曖昧なものだ。

そんな、闇側の俺が昼間から人通りの多い大通りをこんな格好で堂々と歩いているのには理由がある。俺の正体を探ろうと、昨晩からずっとつけて来ている連中が、近くのビルに二人、路地裏に三人、反対側の歩道に二人の計七人。どうやって撒こうかな。殺せれば楽なんだが、こんなに人が多くちゃ騒ぎが大きくなる。それだけは避けなきゃいけない。さて、どうしたものか。このまま家に帰るのもアウト。殺し屋が自分の居場所ばらすってどうなんだよ。

やっぱり、夜になったら攻撃を仕掛けようかな。向こうもそれなりにやれるみたいだし、少しは楽しませてくれよ。

自分でも、今笑ってるのが分かる。それだけ楽しみなんだ。だって、殺し屋と言っても、素人ＶＳプロ。一瞬で終わるからつまんねえんだよ。今回の相手はプロ。しかも七人。夜が待ち遠しいなぁ。

――ブー、ブー――

電話だ。この状況じゃ出たくても出れねえよ。盗聴されたら困るしな。でも、必ず出ろって言われてるし、どうしたものか。ってか、本当なら電話とかもう止めた方がいいんじゃね。俺らの仕事、本当にヤバイし。

出て今の状況伝えるか。

「もしも～し」

『手前、出んのが遅えんだよ！電話には必ず出ろって言ってんだろうが！！』

「電話越しに怒鳴るなよ。耳が痛え」

『ったく。で、仕事の内用』

「ちょっと待ってくれ、今付けられてるんだ」

『はぁ！！？手前何してんだ！さっさと撒いてこっち来い！！』

「無理だ。今回の相手はプロで人数は七。今日の仕事は無しで頼む」

『チッ、わ～ったよ。この仕事は明日に回す』

「あんがとな」

ボスは優しくて助かる。怒りっぽいところは諦めてる。この時間に殺っても問題ない所に居る奴で時間つぶすか。

場所は、そこの左にある狭い路地に入って、壁伝いに建物の屋上に上がる。後は隣の建物に敵が居るから飛び移る。飛んでくる銃弾は鋭い刃のナイフで弾いたり切ったりして防ぎ、ゆっくり近づいていく。

あ、勿論、相手の銃にサイレンサーは付いてるよ。じゃないと街中に銃声が響き渡って騒ぎになるからね。これ以上銃で攻撃しても無駄だと思った男は、短刀を片手に突っ込んでくる。

ん～、期待外れだな～。フードを更に深く被って、近づいてきた男にナイフを一振り。右脇腹から左肩まで傷が出来、血が噴き出す。傷が浅いからまだ死んでないか。倒れている男にナイフを突き刺そうとすると、道路を挟んで向こう側にある建物の屋上から銃弾が飛んできた。それをギリギリで弾いて銃を取り出す。飛んでくる銃弾を防いで倒れている男の頭を打ち抜く。

「囲まれたか」

一人殺したから残り六人。内二人は建物の下に居る。同じ建物の屋上に一人、隣接している建物に一人ずつ、道路の向こう側の建物内に一人、スナイパーライフルで狙ってる。

一人は最初から切り捨てるつもりだったんだ。少し本気出そうかな。一番近くに居た敵に、一歩で近づいてナイフで斬る。飛んでくる銃弾を、今斬ったコイツを盾にして防ぐ。死体は捨ててスナイパーの方を見て左に居る敵に向けて、銃を撃つ。相手は物陰に隠れて身を守るが、盾にしている死体を捨て、そいつに近づいて心臓に銃口を押し当てる。引き金を引いて殺す。

これじゃあ、夜の楽しみが無くなっちゃうな。あ～あ、つまんないな～。って、敵みんな逃げちゃったし……たぶん、襲ってくること無いな。

ボスんとこ行ったら仕事させられるだろうし……今日は帰って寝よ。久々の休暇って事でいいよね。

8

あなたは何で、いつも陰で泣いてるの？
何でみんなの前では、悲しい笑顔をしているの？
いつも何を、抱えてるの？
誰にも相談出来ないことだったら、これ以上は聞かない。
でも、誰かに聞いて欲しいんだったら、私に話して。
少しでも、力になれるだろうから。

あなたに話したところで何も変わらない。
私の心は絶対に晴れない。
だって私は、あなたとは正反対の人間。
あなたは光で、私は闇。
あなたは、周りの人を惹きつける力がある。

気付いてないの？
あなたにも人を惹きつける力があるのよ。
だって私は、あなたに惹かれているんだから。
あなたの行動しだいで、もっとたくさんの人が、あなたに魅了される。

何でそんなことが言えるの？
私はあなたとは正反対の人間なんだよ。
だって私は、家族を……

殺した。

何でそれを！？

大丈夫。誰にも言わないから。
だから、私に話してよ。
あなたが抱えてるのは、そのことに対する罪悪感なんでしょ。

彼女は私の胸の中で泣いた。
ごめんなさい、ごめんなさい……――と言いながら。
泣き止んだ彼女は、全てを話してくれた。
幼い頃に、父親のライターで夜中に遊んで、誤って家に火を点けてしまった事を。
その時に生き残ったのは彼女だけって事を。
彼女に惹かれた私は、いろいろと彼女に関する事を調べていた。
パソコンで彼女の名前を入力して調べた時、ヒットしたのがさっきの火事。
彼女は今まで、そのことを引き摺っていた。

ねえ…

何？

何で、私のことを調べたの？

あなたが好きだから。

そっと、彼女の唇に、自分の唇を重ねた。
彼女は驚いて目を大きく開いてたけど、抵抗はしなかった。
彼女は、私も好きと言って、背中に腕を回してきた。
ねえ、さっきあなたが言った、私が光であなたが闇ってのは、逆

だよ。
私が闇で、あなたが光。
だって、あなたが毎日声を掛けてくれなければ、私はここまで明るくなれなかったんだから。
あなたが、私を変えてくれた。
あなたは私の、光。

8（後書き）

初の百合です。
恥ずかしいわ～。

9

「ひいぃぃっ！　た、助けてくれえぇぇ！！」

逃げ回る人間達を私は、自身の蔓や根で締め上げ、食らう。
私は花の妖怪。普段は人間の姿で森の中に居るが、人が近寄れば本当の姿になって、その命を貰う。私の姿を簡単に説明すれば、動き回る巨大な花だ。

「そこの人間、何時まで隠れて居る」

さっきから木陰で私のことをずっと見ている人間。人間は気配を隠せる者が少なく、また弱い。つまらん生き物だ。

「気付いてましたか」
「あんなに分かりやすい奴は初めてだ」

出てきた男は、他の人間よりも弱そうな奴だった。

「お前、私の事が怖くないのか？」
「はい」

私の問いに、男は迷うこと無く肯定した。
本当に怖くないのか確かめようと、私は妖力を解放して男を威圧する。だが、男は先の人間達とは違って、悲鳴を上げることも、腰を抜かすことも、逃げ出すことも、怯えもしない。こんな人間は陰陽師意外に見たことが無い。

「面白い奴だな。私の気が変わらぬうちに、さっさとこの場を去れ。

先の人間と同じ目にあうぞ」
「いえ、あなたは絶対に、ぼくを食べません」
「ほう…断言するか」

足だけを本来の姿に戻し、根を男の顔目掛けて伸ばす。男は逃げ出すと思ったが、私の予想は大きくはずれ、ずっと私を見ている。あと１ｃｍもない所で、根の動きを止める。ギリギリの位置で止めたにもかかわらず、男は顔色一つ変えない。

「また、会えますか？」

いきなり男がそう聞いてきた。

「この時間には食事を済ませている」

私の返事に男は表情を明るくする。

「それじゃ、また明日！」

男はそう言い、私に背を向けて歩き出そうとする。

「待て、そっちは人里とは反対だぞ」
「あ、ありがとうございます。生まれつき身体が弱くて、家の外に出してもらった事がないから、この辺の地理には疎くて」

男は顔を赤らめ、恥ずかしそうにしている。その姿が、とても可愛く思えた。

次の日の夜。私は食事を終えて昨日の場所に向かっていた。

「あ…良かった。また、会えた」

先に来ていた男は、私の姿を見ると微笑んだ。

「着いて来い」

私は男に背を向けて森の中を歩き出す。男は一言も発さず、大人しく私に着いて来ている。他の妖だったら、すでに食われてるぞ。

視界の先が少しずつ明るくなってきた。この先は私のお気に入りの場所。そこに人間が来たことはない。この男が初めてだ。

森を抜けた先に広がっていた光景は、大きくてきれいな湖と、たくさんの蛍が飛び交っている、幻想的な場所。水面には月が映っている。

「きれいだ……」

私も初めて見た時は、それ以外に言葉が出なかった。

この男は不思議だ。私の威圧に恐れず、ぎりぎりまで串刺しにする勢いで伸ばした根にも、臆することはなかった。

私は自然と、この男に惹かれていた。月明かりに照らされた彼の肌は、ほとんど陽に当たったことが無いのか、とても白く、顔色は悪そうだった。心配になった私は、声を掛けた。

「体調は大丈夫なのか」

「心配してくれるんですか?」

あくまで平静を装って、彼はそう聞き返してきた。それに私の顔が熱くなる。

「だ、誰がお前なんかの心配を！！」
「ははは。大丈夫です。できるだけ、あなたと一緒に居たいので」
な、なな、な、何を言うのだ！？　この男は！？
私はどうしたのだ？　顔が熱い。
「顔、赤いですよ。大丈夫ですか？」
彼が私の顔を見つめる。
「だ、大丈夫だ。それより、あまり無理をするなよ」
男は意外そうに、私をジッと見つめる。そりゃ、人間に対してこんなことを言う妖も珍しいが……
「あの…」
「何だ？」
「俺と、付き合ってください」
「付き合うって、何にだ？」
私がそう聞くと、男は急に笑い出した。何が可笑しいんだ？
「恋仲になってください…って言ったんですよ」
な！？　え、ちょっ、恋仲って…つまり……！？
「わ、私は妖怪だぞ。人間と妖怪が恋仲になるなんて……」
「恋愛に、年齢も、性別も…種族も関係ありません。問題は気持ちです。好きか、そうじゃないか」

好き……もしかして、この気持ちがそうなのか？　やっぱり、分からない。

「私には好きという気持ちは良く分からない。だが、お前が教えてくれるのなら、私はお前とこいな…！？」

私の唇が、男の唇で塞がれた。突然のことに驚き、私は何も出来なかった。

「また明日、ここに来ます…」

男は私にそう告げて、帰っていった。

「早く、明日にならないかな……」

10

「私と付き合ってください！」

いきなり、女子に屋上に呼び出され、告白された。

「ごめん。君のことをよく知らないし、友達以上の関係にはなれそうにない」

いつも言う台詞。

俺はよく女子に告られるが、俺のどこがいいんだ？　自分の顔を鏡で見ても、どこにでも居そうな平凡な男としか、思えない。他の男子に今の言葉を言ったら、半殺しにされるだろうが。

「そっか……」

「暫くは互いに関わらない方がいいね。友達としてでも、暫くは気まずいだろうから、気持ちの整理がついたら声を掛けてよ」

「うん……」

女の涙は苦手だ。不快な気分になる。別に俺が何かしたわけでもないのに……これは反則だろ。別に、はっきりと泣いてる姿を見たわけじゃない。ただ、泣くのを堪えてるのが声で判るから。

いつからだっけ…？　人が、その形をした煙に見えるようになったのは。何がきっかけなのかも分からない。もしかしたら、生まれつき、そう見えるのかもしれない。幼い頃はちゃんと見えた気がするけど。ただ、涙とかそういうのは、光を反射するから分かる。

さっきのは、自分と幼馴染以外の人間の顔を見たことないから思えるんだろうな。

「きぃくん！　一緒に帰ろ！」

きぃくんってのはこいつ、紫藤芽衣が勝手に呼んでる。最初は止めろって言ってたけど、もうめんどくさくなった。俺の本名は桐生凌。

こいつは唯一、姿が分かる人間。

「あぁ……」
「また告られたの？」
「うん」

確か、今週で二回目だったな。ほんと、俺のどこがいいんだか……

「女たらし……」
「何で！？」

いや、何でそんなこと言われなきゃいけないの。

「冗談だよ」
「なんだ……」
「半分」
「オイッ！」

何だよ…安心した瞬間に落ち込ませるか？

「まぁ、仕方ないよね。きぃくんは、自分と私以外の人の姿は判らないんだから」

このことは、家族とこいつしか知らない。

「きぃくん…」
「ん？」
「私と、付き合わない？」

こいつまで言い出すか……

「それは冗談か？」
「本気だよ」

返事は微妙だな～。

「俺の世界は狭すぎる。自分以外にはお前しか見えてないから。そんな人間に答え出せって、無茶言うにも程があるぞ」

こいつはもう少し利口だと思ってたけど、俺の勘違いか。いつかは言うんじゃないかって…何となくそんな気はしてたけどよ。

「だよね」

あ～…くそっ！　またこの声。泣き出しそうな人間の出す、気落ちした声。顔が見えない代わりに、声で判断するようになった俺には、僅かな違いでも分かっちまうんだよな。

「暫く、考えさせてくれ……」

どこかで聞いた事がある、俺の好きな言葉。

『他人と向き合うにはまず、自分から』

今までやってるようで、全くやってなかった。逃げてただけだっ

た。
芽衣は他の人とは違う。俺のことを知ってるから、今まで言わなかっただけで、自分の気持ちよりも俺を優先してくれてたのかもしれない。
だから、確り考えて、ちゃんと答えを出す。

今、俺は屋上に来ている。あれから一ヶ月……俺は、漸く答えを出せた。
それにしても……

「緊張する～……」

今までは呼び出されるだけだから分からなかったけど、呼び出す側って、めちゃくちゃ緊張すんのな。

「きぃくん……どうしたの？」

屋上の扉を開けて、芽衣が俺の隣に来た。

「一ヶ月前の、答えが出たよ」
「……」

芽衣は黙って、俺の次の言葉を待ってる。

「芽衣が居なかったら俺は、自分と正面から向き合うことは出来なかった」

俺の予想外の発言に、芽衣は戸惑ってる。

「芽衣が居なかったら俺は一生、人の姿が判らないままだった」

だから、はっきり言うよ。

「芽衣とは付き合えない」

芽衣は大切な幼馴染だけど、カレカノの関係にはなれそうにない。

すぐに泣くかと思ったけど、芽衣は予想外の発言をした。

「何となくそんな気はしてた。だから、泣かないよ」

そんな泣きそうな顔して言っても、説得力ねえよ。

ありがとな、芽衣……

11

学校、屋上の金網の向こう側、下に続いてる階段の方からそんな声が掛けられた。

俺は今、自殺する前に出来るだけ遠くの方を見て、決心を固めてる。

「何してるの？」

「見りゃ、分かんだろ」

「あなたも、自殺しに来たんだ」

「ってことは、お前もか…」

「うん」

同じ学校、同学年の自殺志願者。

「ねぇ、あなたは何で、死のうと思うの？」

死ぬ理由ね～。簡単な答えだ。

「何も信じられなくなった」

小さい頃は虐待を受けてた。親戚のおばさんが俺を引き取ってくれたけど、そのおばさんは詐欺にあって、一昨日、自殺した。

学校では虐めを受けてた。心（自分）を守るために、カッターやタバコで傷を付け、何とか耐えてきたけど、おばさんの出来事で終わったよ。

「私も同じ理由。原因は違うだろうけど」

原因まで同じだったら、ある意味運命だろ。

「あなたはまだ、完全に信じられなくなったわけじゃないと思うよ。だから、死ぬのを躊躇う。あなたが行かないんだったら、私が先に逝って待ってる」

彼女はフェンスを越え、俺の隣に立った。フェンスの方を向き、手を離して後ろに倒れる。

「バイバイ」

「ッ！？」

反射的に、腕を伸ばして掴んじまった。片方は金網を掴んで何とか耐えてる状態。

「何で止めるの？」

「分かんねぇよ……」

「あなたが生きるって言うなら、私も生きるよ」

「何だよ、それ……俺に惚れてんの？」

冗談で言ったつもりだった。でも。彼女は真顔で……

「うん」

それだったらもう少し、彼女のことを知りたいな。何で俺のことが好きなのか？　とか、他にもいろいろ。

「死ぬのは、それからだって構わないよな……」

彼女は俺の考えが分かったのか、微笑んできた。

力いっぱい、彼女を引っ張る。彼女の手が金網に届き、それに捕まって壁に足を付けて踏ん張ってる。彼女も俺も、二人して落ちるって事にはならなかった。

彼女の言うとおり、俺はまだ、何もかも信じられなくなったってわけじゃないみたいだ。だって、助かった今は彼女の事を、信じたいと思ってるから。

12－1（前書き）

暗いです。
それ以外に言いようがない。

12―1

何で、誰も完全に壊してくれない。
中途半端に壊されて、中途半端に感情が残った。
いっそのこと、感情なんて失ってしまいたい。
何度そう思っても、感情は残る。
消えてくれない。
生きるのが怖くなって、死のうとした。
でも、死ぬのが怖くって、途中で止めた。
何度も死のうとして、何度も止める。
いつしか、心が二つに分かれた。
死ぬのが怖くって生きようとする自分と、生きるのが怖くって死のうとする自分。
気が付いたら刃物を自分の胸に突き立てて、死のうとしていた。
取り乱して、包丁を投げ出した。
床に転がった包丁を見て、また意識が朦朧とする。
包丁を持って自分の手首を切った。
そしたら自然と、気分が楽になってきた。
でも、何の解決にもならない。
次の日には包丁を首筋に当ててた。
そしてまた手首を切り、また、胸か首に当てる。
こんなんじゃ何時まで経っても、二つの恐怖から解放されない。
誰か、壊して……

放課後、屋上に居た。
屋上に仰向けに寝て、空を見る。
誰かが、屋上に来た。
茶髪の女の子。
女の子は無言で近づいてきて、腕を引っ張ってきた。

いきなりで驚いたけど、抵抗する気にはなれなかった。
リストバンドで傷は隠してるものの、見られても別に良かったから。
リストバンドをどかして、沢山傷の付いた手首を見た彼女は少し引いてたけど、息を短く吐いて俺の顔を見た。

「何でこんなことするの？」

答えない。
答える必要が無い。
赤の他人に答える必要が。
答えたら、壊してくれるの？
もしそうなら、答えるよ。

「痛く、ないの？」

痛みなんて、忘れた。
どんな感覚だっけ？
教えて。

「……」

何で、そんな悲しそうな顔するの？
他人のことなのに、どうして？
分からない。
分からないけど、他人のためにそんな顔しないで。
名前も知らない少女が、両手を背中に回して抱き寄せてきた。
暖かい。
落ち着く。
少女の身体が震えてる。

泣いてるの？
何で？
悪いことした？
それとも、他の誰かにされたの？
お願いだから、泣かないで。

「もう、こういうことしちゃダメだよ」

こういうことって？
手首の傷のこと？
それは約束できないよ。
勝手にやっちゃうんだもん。
いつまで泣いてるの？
何で他人のために、そこまで泣けるの？
何で、他人の傷を背負おうとするの？
君には傷ついて欲しくない。
自分と同じ道を進んで欲しくない。
何で、そう思うんだろ？
分からない。
分からなくてもいい。
これ以上、この少女と関わっちゃいけない。
傷つけちゃうから。
さようなら。
ありがとう。
二度と会うことはない。
だから、もう一度言うね。

「さようなら」

少女の腕の中から出て、フェンスを登る。

突然のことで理解できなかったみたい。
フェンスを登りきって反対側の少ししかないスペースに立つ。
彼女が駆け寄ってきて、フェンスの向こうから手を伸ばしてくる。
何で、そんな怯えた顔をするの？
死ぬのは君とは関係ない人間なんだよ？
君は、とても優しいんだね。
もっと早く会えてたら、今とは違うことをしてたんだろうな。
浮遊感が全身を襲う。
あれだけ死ぬのが怖かったのに、何でだろ？
怖くないや。
彼女のお蔭かな？
だとしたら、お礼を言わなきゃね。

「ありがとう」

笑って言えたなら、いいな。

12－2（前書き）

前の話の女性視点です。
まぁ、もう一人のほうは性別を指定してないんですがw
暗い内容に加えて切ないです。

12―2

あなたは何で、いつも暗い顔をしてるの？
何で、誰とも関わらないの？
何で、誰の呼びかけにも答えないの？
何で、空を眺めるの？
分からないよ。
あなたの考えが。
いつからか、あなたは手首に傷を作って学校に来てたよね。
リストバンドで隠してた見たいだけど、少しだけ、はみ出てたよ。
誰も気付いてないのが不思議なくらい。
どうして、リストカットなんてするの？
どうして、そんな痛いことするの？
もしかして、痛みを感じないの？
クラスメイトが傷のある腕を掴んでも、全然痛そうにしてなかったよね。
教えてよ。
そんな事をする理由を。
教えてよ。
あなたの事を。
私は知りたいの。
何で知りたいのかは分からない。
でも、あなたのそんな顔、見たくない。
何でもなさそうにしてるみたいだけど、とても苦しそう。
お願いだから、教えて。
自然と、涙が流れてた。
泣きたいわけじゃない。
止まって欲しいのに、止まらない。

「ごめんね」

何で謝るの？
あなたは何も悪くないのに。
今、あなたを苦しめてるのは私の方なのに。
お願いだから謝らないで。

「ありがとう」

何に対しての『ありがとう』なの？
私は何て答えればいいの？
私の腕の中から抜け出るあなた。
何をしようとしてるのか、何となく分かってた。
なのに、身体が動かない。
止めなきゃいけないのに。
お願い、止めて。
ダメ。
フェンスの向こうにいるあなた。
私の方を向いて、ゆっくりと後ろに倒れていく。

「さようなら……」

その言葉が聞こえて、私は駆け出した。
あなたを助けるために。
でも、間に合わなかった。
あと少しで触れられたのに。
あなたの服に掠めることしか出来なかった。
私は泣いた。
おもいっきり泣いた。
目の前で自殺したあなたを想って。

止められなかった自分の無力さを呪って。

「ありがとう」

大きな声で泣く私の耳に、あなたの声がハッキリと聞こえた。
やっと分かった。
何で、あなたの事が気になってたのか。
私は、あなたの事が好きだったんだ。
好きだったのに。
この想いを伝えられない。
もう、届かない。
でも、私は声に出して言う。
動かなくなったあなたに向けて。

「大好きだよ……」

13

雨が降りそうな曇天の空を眺めながら、通学路を歩く。
傘は持ち歩いてない。
雨が降らないかもしれないのに、持ち歩くのが嫌だからだ。
雨が降ったら濡れて帰ればいい。
すぐ風呂に入れば問題ないから。
イヤホンから流れるテンポの速い音楽が、朝の低いテンションを上げていく。
学校は本当につまんない。
友達がたくさんいれば楽しいとか言うけど、実際そうでもなかったりする。
学校以外で会おうと思えば会えるし、そもそも友達作るのが苦手だから、あまり人と関わらない。
部活も入ってるけど、つまらなすぎて今じゃ幽霊部員。
たまに部室に顔を出すけど、かなり静かだ。
文芸部じゃ、それが普通なのかもしれない。
他の学校の事とか知らないから、基準が分からないし。
学校行く前にコンビニに寄る。
飲み物と昼飯のパンを買って店を出る。
サボろっかな――って考えが浮かんだけど、止めた。
担任からの連絡がめんどくさい。
学校に着いて、自分のクラスに行く。
教室は、まだ朝も早いのに騒がしかった。
それが嫌いで、窓際一番後ろにある自分の席に早足で行って、イヤホンの音量を上げて机に突っ伏す。
授業は、受けている時は写すところだけ写して、残り十分になったら次の授業まで寝ている。
担任が教室に入ってきて、ショートホームルームが始まる。

規律――と号令が掛かっても寝続ける。
担任は注意してこない。
いつもの事で諦めてるから。
空を見ると、雲の隙間から陽が差していた。
担任が出て行ってすぐに、教室を出る。
向かうのは屋上。
授業はサボる。
ノートは数少ない友人にでも写させてもらう。
この学校はノートを集めたりはしてないから、コピーでもしとけば十分。
屋上に出て、扉のすぐ横に取り付けられた梯子を上る。
ここに来る人は少ないし、貯水タンクの裏側にでも居れば気付かれない。

「雅ー！」

誰かが自分の名前を呼ぶ。
めんどくさいから返事はしない。
どうせ、ここに居る事は知ってるから。

「やっぱりここに居た！」

うるさい。
大声出さないで。
身体が重いんだ。

「ちょっと、聞いてる？」

顔を覗き込んでるんだろう。
起きてないふりをして、行動を窺う。

「寝たふり、ばればれだよ」

案外早く気付かれた。

「身体が重いんだよ」

「具合悪そうだもんね。保健室行ったら？」

「熱なかったら帰してもらえないんだから、行く意味が無い」

「熱、ありそうだけど」

自分じゃ分からない。

何が何でも保健室に連行されるだろうな。

起きて梯子を降りる。

あいつもついてきた。

保健室に行って体温を測る。

熱は、３７．９度。

本当に熱があった。

「どうする？」

「帰ります」

「今、紙に書くから待ってね」

早退届を受け取って、職員室に行く。

学年の先生を呼んで伝え、教室に鞄を取りに行く。

教室に入ると騒がしいけど、みんな確りと授業を受けていた。

先生に早退する事を伝えて校門に行くと、あいつが居た。

「家は誰も居ないんでしょ？」

「うん」

「私が看病してあげる」

「必要ない」

本当に必要ない。

どうせ寝とくだけだし、これ以上酷くなっても構わないから。

「遠慮しないで。酷くなってトイレに行くのがやっとになったら、ご飯とかどうするの？」

「食べなければいい」

「治るものも治らないよ」

「治らなければ学校休める」

めんどくさい。

お願いだから、解放して。

結局、押しに負けて家に来てもらった。

部屋で大人しく横になっててって言われたから、今、横になってる。

正直、楽だ。

誰かが看病してくれるのは凄く久しぶりだ。

小学校低学年まではあったけど、いつからかなくなった。

暫くして、あいつが部屋に入ってきた。

「具合はどう？」

「普通」

ベッドの端に腰掛けて、おでこに手を当ててきた。

そのあと自分のおでこに手を当てて体温を比べる。

「結構高いね。体温計、どこにある？」

「去年からどこにあるか分からない」

体温なんてあんま気にしないから。

「私の家から取ってくるから待ってて」

「うん」

こいつの家はすぐ隣。

生まれた時からの付き合いだ。

瞼が重い。

寝よう。

あれからどのくらい経ったんだろう。

隣にはあいつが寝ていた。

枕元に置いておいた携帯の液晶を見る。

午後十二時十七分。

寝たのが九時過ぎだから、およそ三時間。

「起きたの？」

「うん」

「今、お粥作るね」

暫くして、鍋を持って戻ってきた。

上体を起こして壁に寄りかかる。

お椀によそってくれたお粥を受け取って食べる。

味付けはちょうど良くて美味しい。

「ごちそうさま」

全部食べてお椀を渡す。

もういいの？　って聞かれたけど、一杯全部食べれば十分だと思う。
体温計を渡されて、脇に差して計る。
暫くして音がしたから、確認してみる。

「３８．５度か。少し高くなってるね」

体温なんてどうでもいい。
今は身体が重いし眠くて、あんまり頭が働かない。
背中に腕を回されて抱き寄せられた。
抵抗する気にもなれずに、ただ、されるがまま。

「こんな時に言うのもどうかと思うけど、好きだよ。雅の事が大好き」

突然の事に、どう返事をしていいのか分からなかった。
でも、嫌いじゃない。
悪いけど、暫く待ってて。
今は、眠い。

13（後書き）

主人公の一人称を出さないのは、ノーマルか百合、どっちにでも出来るようにです。

前回のもそうですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5818q/

いろんなジャンルの短編集

2011年9月27日03時10分発行